研究テーマ

かかわり合い，共に育ち合うための援助の工夫

～協同的な活動を通して～

沖縄市立美里幼稚園
教諭　徳元　久理子

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年の子どもたちを取り巻く社会環境は，少子化，核家族化，情報化が進み，子どもたち同士が直に触れ合い，刺激し合いながら育ち合える環境ではなくなってきているのが現状である。また，地域でも安全に遊べる場所が減り，同年齢や異年齢でかかわれる環境も少なくなっている。

平成 18 年度の中央教育審議会における「幼稚園教育の現状と課題，改善の方向性（検討素案）」では，課題として子どもたちの消極的な姿勢，言語表現能力や集団とのかかわりの中で自己発揮する力の不十分さ，様々な体験の不足などが指摘されている。

幼稚園教育要領「人間関係」の領域では，「他の人々と親しみ，支え合って生活するために，自立心を育て，人とかかわる力を養う」と示されている。また，内容に「友達と一緒に物事をやり遂げようとする気持ちをもつ」ことが示され，「幼児は，友達と共に遊ぶ楽しさを経験するうちに，友達と一緒に物事をやり遂げたいという気持ちが強まってくる。その一方で，欲求や考えがぶつかり，葛藤したり関係を調整したりする能力を身に付けていく。」とある。

園生活を送る上で，友達の存在は人的環境として大きくかかわってくる。一緒に遊ぶ友達がいることで遊ぶ楽しさを感じ，真似したり，刺激し合ったりしながら遊びを深めていくことができるのである。特に 5 歳児後半の子どもたちは，協同性が芽生え，一つの目的を共有し，それを実現しようと協力して遊びを進めていくことが可能となる時期でもある。

本園の実態を見てみると，明るくて，人なつっこく，積極的に話しかける子が多い。半面，遊びの中で自我を通そうとして友達の思いを無視して遊びを進めたり，自分の思いが通らないと遊びから抜け出してしまう子も見られる。また，気の合う友達とのつながりを楽しむだけで，互いに遊びを工夫したり，創りだしたりすることができない状況もみられる。

これまでの私自身の保育を振り返ってみると，個を大切にするあまりに，集団の中の個の育ちとして，子どもたちがかかわり合うことで何が育っているのかを把握することが弱かった。また，一人一人を集団の中で自己発揮させながら，皆で遊びを創り上げていく場づくりや援助の仕方に課題がある。

これらの現状や課題，子どもたちの実態などを踏まえ，今一度，集団の中での個の育ち合いを見つめ直し，かかわり合える場づくりと援助の仕方を工夫していく必要がある。

そこで，皆で協力し合うことの楽しさや集団の中で，自己を発揮する喜びを味わえる協同的な活動を取り入れたいと考えた。協同的な活動は，学級全体で共通の目的をもって活動することや仲間と役割分担したり，協力したりして目的に向かって取り組む活動である。協同的な活動を進めるにあたって，グループ活動を取り入れ，友達とのつながりを把握しながら個にあった援助を工夫していきたい。また，幼児同士の話し合いの場を大切にし，一人一人が活動の目的を確認し，友達と共有することができる場づくりを工夫していきたいと考えた。

以上のことから，協同的な活動を通して，話し合う場や援助の仕方を工夫することにより，かかわり合い，共に育ち合うことができるであろうと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　目指す幼児像

○友達と進んでかかわり，生き生きと活動する子

○友達と協力し，工夫し合う子

Ⅲ　研究目標

協同的な活動を通して，かかわり合い，共に育ち合うための援助の工夫

Ⅳ　研究仮説

１　基本仮説

協同的な活動を通して，話し合う場や援助の仕方を工夫することにより，かかわり合い，共に育ち合うことができるであろう。

２　具体仮説

⑴ 幼児期における協同性の意義を捉えるとともに，幼児の実態調査を行い，分析することにより，実態に応じた援助の在り方が明確になるであろう。

⑵ 協同的な活動を取り入れた年間指導計画を作成することにより，見通しを持った活動の展開・援助の工夫をすることができるであろう。

⑶ 協同的な活動の中に，学級全体やグループでの話し合いを取り入れ，個にあった援助をすることにより，かかわり合い，共に育ち合うことができるであろう。

Ⅴ　研究構想図

・次のページ

Ⅵ　研究内容

１　研究内容１

⑴ 幼児期と協同性

協同性を育むためには，個が生きる集団が不可欠である。そこで，個と集団のかかわりの在り方から理論研究を進めることにした。

① 幼稚園教育要領「人間関係」の捉え

幼稚園教育要領「人間関係」の内容の取扱いでは，「教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人とかかわる基盤になることを考慮し，幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し，試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう，幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること」

「幼児の主体的な活動は，他の幼児とのかかわりの中で深まり，豊かになるものであり，幼児はその中で互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ，一人一人を生かした集団を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること」と示されている。

また，一人一人に応じるための教師の基本姿勢として以下のことが示されている。

ア　信頼関係を築くための教師の役割

(ｱ) 幼児の行動に温かい関心を寄せる

幼児のありのままを受け止め，期待をもって見守ること。幼児が他者を必要とするときに，それに応じる姿勢を常に持つこと。

(ｲ) 心の動きに呼応する

答えを示すのではなく，幼児の心の動きに沿って共に心を動かしたり，知恵を出し合ったりしながらかかわること。

(ｳ) 共に考える

幼児の立場に立って，幼児の調子に合わせて考える。幼児と同じことをやってみたり，そばに寄ったりすることなどによって，体の動かし方や視線といった言葉にならないサインを感じとること。

(ｴ) 集団のつながりを育てる

心のつながりのある温かい集団を育てること。集団の人数が何人であろうとも一人一人が掛け替えのない人間として生きようとしている存在であると捉える教師の姿勢が重要。どの幼児に対しても集団の一員としてこのような姿勢で接する教師と生活を共にする中で，幼児は互いを大切にする姿勢を身に付けていく。

以上のことから，幼児と教師，そして幼児同士の信頼関係を基盤に，一人一人が自己発揮できるような集団づくりをしていく必要があると考える。

研究構想図

社会的背景
少子化，核家族化，情報化などの進展により，他者と触れ合って遊ぶ直接的体験が少なくなっている。

県教育施策
○環境を通して行う教育の充実
○遊びを通しての総合的な指導の充実
○基本的な生活習慣の形成
○園内研修の充実

市教育施策
望ましい環境構成を重視した幼稚園教育の充実

園教育目標
○元気で明るい子
○考えて行動する子
○思いやりのある子

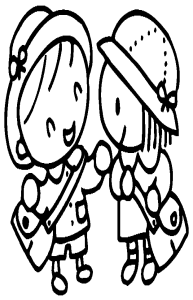
家庭・地域の実態
核家族が多く，両親共働きで学童や預かり保育の子が多い。

幼児の実態
明るく元気で，人なつっこい子が多いが，友達とかかわり合って遊ぶことに興味が持てずに遊びから抜け出してしまう子も見られる。

教師の実態
一人一人を集団の中で自己発揮させながら，皆で遊びを創り上げていく場づくりや援助の仕方を模索している。

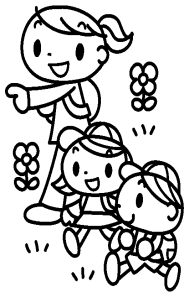
目指す幼児像
○友達と進んでかかわり，生き生きと活動する子
○友達と協力し，工夫し合う子

研究テーマ
かかわり合い，共に育ち合うための援助の工夫
～協同的な活動を通して～



研究目標
協同的な活動を通して，かかわり合い，共に育ち合うための援助の工夫

研究の基本仮説
協同的な活動を通して，話し合う場や援助の仕方を工夫することにより，かかわり合い，共に育ち合うことができるであろう。



具体仮説１
幼児期における協同性の意義を捉えるとともに，幼児の実態調査を行い，分析することにより，実態に応じた援助の在り方が明確になるであろう。

研究内容１
○幼児期と協同性
○幼児の実態把握

具体仮説２
協同的な活動を取り入れた年間指導計画を作成することにより，見通しを持った活動の展開・援助の工夫をすることができるであろう。

研究内容２
○協同性を育む上での留意点
○年間指導計画の作成

具体仮説３
協同的な活動の中に，学級全体やグループでの話し合いを取り入れ，個にあった援助をすることにより，かかわり合い，共に育ち合うことができるであろう。

研究内容３
○話し合う場の工夫と援助

検証保育の計画・実践・分析・考察

研究のまとめ・研究成果と今後の課題

② 育ち合いの意義

ア 育ち合いとは

保育用語辞典によると「育ち合い」とは，子ども同士が相互にかかわり合い，ともに成長すること。たくさんの他者と出会う園生活は，子どもたちにとって育ち合いの重要な機会である。

イ 個の充実と集団による育ち合い

「時代の変化に対応した新しい幼稚園教育の在り方について（文部省 1997）」の中で，個と集団の在り方が以下のように示されている。

『集団とのかかわりの中で幼児の自己実現を図ること』

(ｱ) 集団生活の場としての幼稚園

集団生活の中で，幼児の行う活動は，個人での活動，幼児の興味関心で結ばれたグループでの活動，学級全体での活動など多様に展開されるものであり，それぞれの活動が幼稚園の生活の中で十分に展開されることが必要である。特に幼稚園教育においては一人一人に応じるということが大切にされているが，このことは，必ずしも個人の活動のみを重視するということではなく，グループや学級全体などいずれの活動においても一人一人が生かされることが必要だということを意味しているのである。そのためには，集団が一人一人の幼児にとって安心して自己を発揮できる場になっていなければならず，教師と幼児，さらに幼児同士の心のつながりのある温かい集団とならなければならない。お互いの信頼感で結ばれた温かい集団は，画一的な指導から生まれるものではなく，一人一人を生かした援助が何よりも重要である。

(ｲ) 幼児一人一人を生かす集団の形成

幼児は様々な集団における活動を通していろいろなものを学んでいく。幼児の主体的活動は，友達との相互交渉で磨かれ，豊かになるものである。その中からお互いが必要な存在であることを十分に認識することにより人とかかわる力も育成される。また，友達と一緒にものづくりや後片づけなどの共同作業に主体的に取り組み，何かをやり遂げる過程を通して，それが自分たちの活動だという意識が芽生えてくる。そして，みんなで協力してやり遂げようとする中で，自分たちが選んだ活動だから責任をもとうとする気持ちや自分のやりたいことを時には我慢するといったことを学んでいく。

以上のことから，心のつながりのある温かい集団を形成し，互いに刺激し合い，協力することができる場を作っていくことが育ち合うことのできる幼稚園教育につながっていくと考える。

③ 幼児期における協同性の捉え

ア 協同性とは

岩立京子（幼稚園じほう）は協同性を以下のように捉えている。「他者と同じ目的をもち，相互に協力し合い，高め合えるような関係性」「協同性の高い集団においては相互に意見を出し合い，認め，各自の力を出し合うことが多く，友好的な雰囲気がうまれてくる」

イ 協同性と自発性

国立教育政策研究所・教育課程研究センターによる「幼児期から児童期への教育」の中で「幼児期の教育において最も大切なことは，幼児一人一人の自発性をはぐくむことである。幼児期にはぐくまれた自発性は，生涯にわたって積極的に何かを学んだり，感動したり，さらには現状を改善していこうとする力の芽となる。このような自発性は，幼児一人だけの力で獲得されるものではなく，教師や他の幼児たち，様々な人々とのかかわりの中ではぐくまれていく。すなわち，協同性が育つ中で自発性がはぐくまれていく。」と示されていることから，協同性と自発性は相反するものではなく，互いに影響し合って育つものである。

ウ 発達の過程に応じた協同性の育ち

国立教育政策研究所・教育課程研究センターによる「幼児期から児童期への教育」の中では以下のように協同性の育ちが示されている。

(ｱ) 幼児期前期（3，4歳児）

この時期は協同して何かをすることがまだうまくできない。むしろ，この時期の幼児たちにとっては，「同じ場所に一緒にいる」ことや

「同じことをする」ことに大きな意味がある。他の幼児の体の動きを知らず知らずのうちにまねることで，新たな感覚を体験したり，周囲のものや遊具などとの多様なかかわり方を学んでいく。また，同じ場にいて感情を共有することは，幼児一人一人の共感性を豊かなものにしていく。そして，仲間関係ができてくるようになると，幼児は自分の思いやこだわりを積極的に他の幼児に言葉や身体で伝えようとする。もちろん，うまく相手に伝わらなかったり，逆に相手にイメージを押し付けられて，嫌になることもあるが，それでも何とか自分の世界を相手と共有したいと思い，相手に賛同したり折り合ったりしていくことを学んでいく。

(ｲ) 幼児期後期（5歳児）

この時期の幼児たちは，一つの目的を共有し，それを実現しようと，協同して遊びや作業を進めていくことができるようになる。また，ルールのある遊びを好むようになり，それぞれの思いやこだわりを伝え合うだけではなく，やり取りをしながら新しいアイディアや遊びのルールを生み出し，それを互いに受け入れることもできるようになる。また，幼児自身が自分と他者とがお互いに気持ちよく過ごせる関係性を求め，生活の中でも相手に感謝されることを自発的にするようになり，協同性が育ってくる。

特に仲間意識が育ち関係が深まる 5 歳児後半には，学級全体で共通の目的をもって活動することや，仲間と役割を分担したり協力したりして目的に向かって活動する協同的な活動を取り入れていきたい。このような活動は，小学校以降の生活や学習の基盤づくりにつながっていく。

④ 幼児期のコミュニケーション

保育用語辞典によると「コミュニケーション」とは，二者間で情報，観念，認知，感情，気持ちなどを伝え合い，分かり合う過程であると示されている。

国立教育政策研究所・教育課程研究センターによる「幼児期から児童期への教育」の中では，幼児期のコミュニケーションの育ちを以下のように示している。

ア 身体表現から言語表現へ

幼児期は，コミュニケーションの仕方が，身体表現による伝え合いからその土台の上に言語表現が育ち，言語表現による伝え合いへと，大きく変化していく時期にあたる。

表情や身振り，手振りなどを交えて何とか言葉で相手に伝え，次第に言葉によって自分の意図を相手にわかるように伝えられるようになっていく。

イ 言葉にできない思いを大切にする

幼児期においては，コミュニケーション技能の獲得の仕方は一人一人異なり，その違いは大きい。そのため，うまく言葉で伝えられないもどかしさを教師は受け止め，それを周りの友達に言葉によって伝えることも大切である。そういった教師の言葉を聞くことにより，次第に自分でも言葉で伝えられるようになっていく。

ウ 経験を言葉で表現することで学ぶ

幼児が活動に取り組んでいるときや活動後に教師がその活動について語ることにより，幼児は自分の経験していることが，どのように言葉で表現できるかを理解することができる。また，友達との協同的な活動において，友達が活動の意味や楽しさを言葉に表してくれることから，まだうまく言葉で表現できない幼児も言葉での表現を聞いて学ぶことができるのである。

森上史朗らによる保育内容「人間関係」の中で，幼児期のコミュニケーションでは信頼関係が最も重要で，「保育者が一人一人を受け止める態度をとっていることを背景に，子ども同士がお互いに一緒にいること，一緒に遊ぶことを喜び合い，保育の場が安心して共に居る場になっていれば，子ども同士は自然に気持ちを伝え合い，気持ちを受け止め合うようになっていく。」と述べている。

以上のことから，伝え合いたくなるような雰囲気づくりや互いに受け止められる仲間関係を築いていくための援助を工夫していきたい。

⑵　幼児の実態把握

①　実態調査アンケート

ア　調査目的

幼児の家庭での様子や人とのかかわり，保護者の意識を把握し，本研究の資料として役立てる。

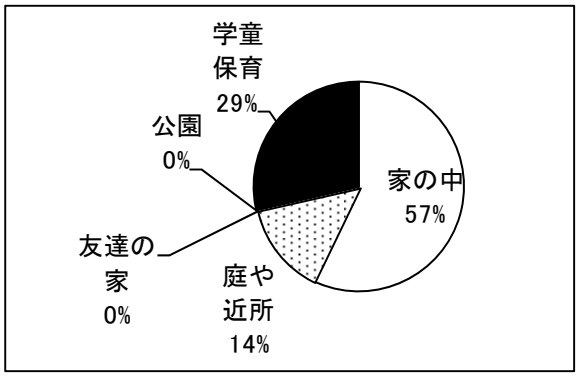
イ　調査方法

(ｱ)　調査対象：美里幼稚園１組30名の保護者

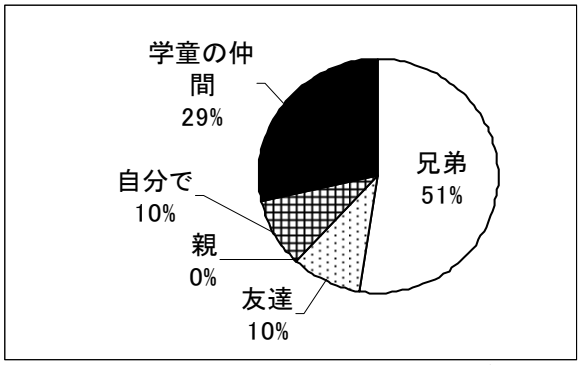
(ｲ)　調査日　：平成19年11月14日

(ｳ)　回収率　：70%

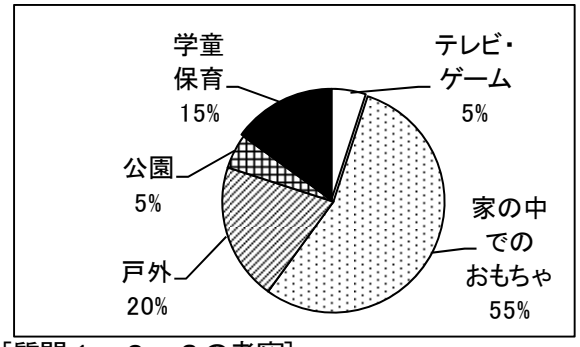
質問１　降園後にお子さんが主に遊ぶところはどこですか？



質問２　お子さんは，主に誰と遊んでいますか？



質問３　お子さんは普段はどんな遊びが多いですか？

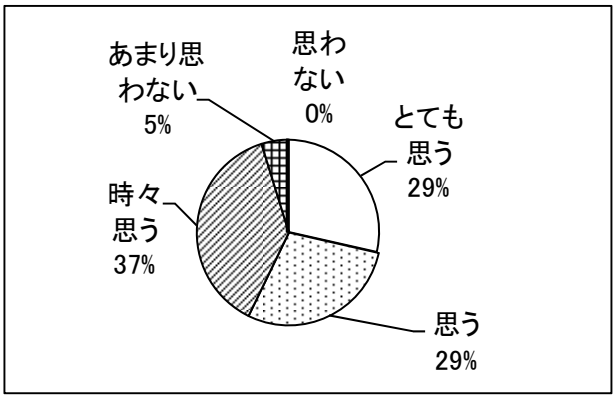


[質問１・２・３の考察]

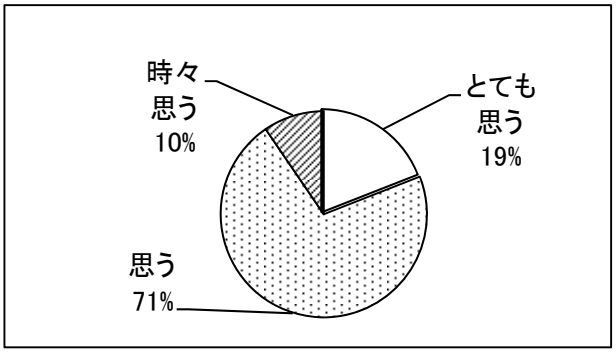
降園後の子どもたちの遊びの実態として，家の中で遊ぶ子が多く，遊ぶ相手は兄弟が最も多かった。遊ぶ内容は，家の中でのおもちゃでの遊びが多かった。

このことから，子どもたちの日常の遊びにおいては，多くの友達とかかわって遊ぶことが少なく，遊びも室内での遊びが中心で，友だちと一緒に遊びを工夫したり，創りだしたりする経験が少ないことが考えられる。

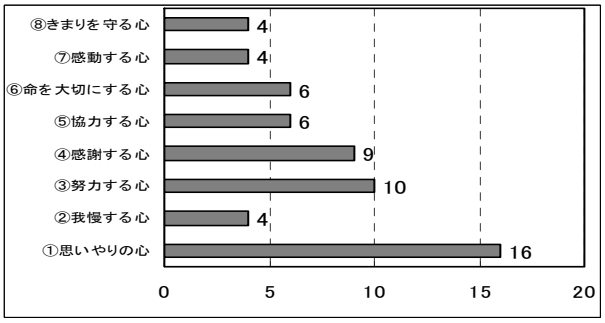
質問４　子どもたちが一緒になって安全に遊べる場所が少なくなっていると感じますか？



質問５　幼稚園生活の中で友達とかかわり，一緒に遊ぶ体験を多くさせてほしいと思いますか？



質問６　幼児期にお子さんに身につけてほしい心はどれですか？※（３つ選ぶ）

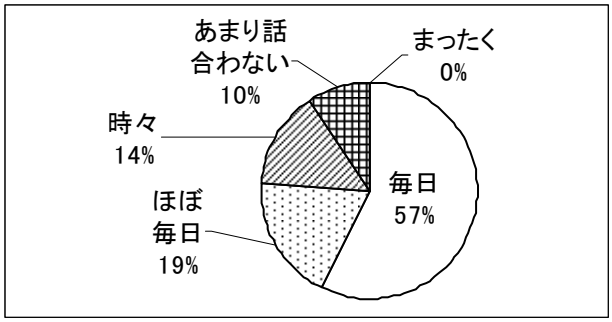


[質問４・５・６の考察]

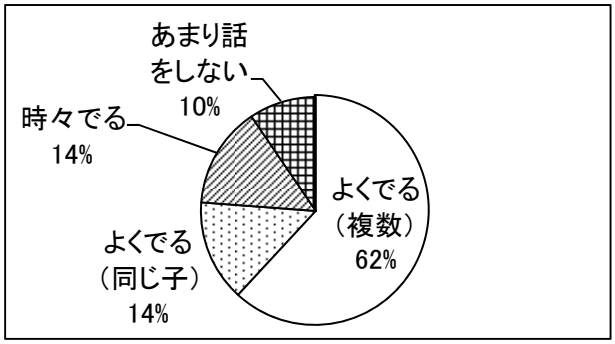
親の子育ての実態として，半数の親が地域で

安全に遊べる場所が減っていると感じ，90％の親が幼稚園生活の中で子どもたちがかかわり合って遊ぶ経験をしてほしいと願っていることがわかった。幼児期に育てたい心情の面については，「思いやりの心」が最も多かった。このような心は，人とかかわり，互いによさを認め合う中で育まれることから，園生活において信頼関係で結ばれた温かい雰囲気づくりをしていく必要がある。

質問７　普段の生活の中でお子さんの話を聞いたり，一緒に話し合ったりする時間がどのくらいありますか？



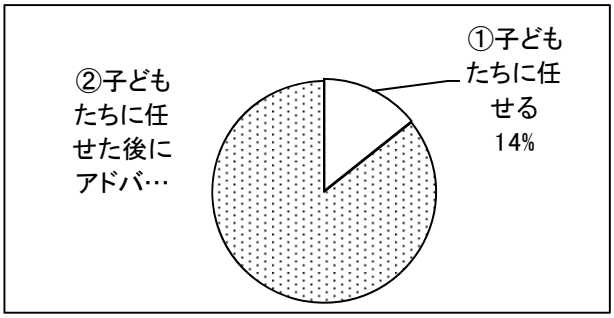
質問８　幼稚園での話の様子から，友だちの名前がでますか？



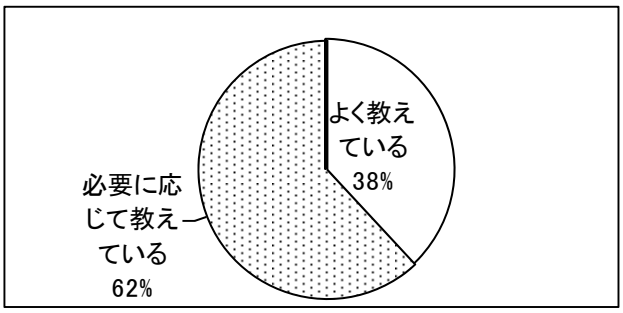
［質問７・８の考察］

家庭での親子の話し合い時間を見てみると，半数が毎日話し合う時間を持っていることがわかった。76％の子が友達の話をよくしていることもわかった。子どもたちにとって友達の存在は大きく，その出来事を伝えたいという思いが強いと考えられることから，クラス便りなどで家庭でも話をしたり，聞いたりする時間を持つように啓発していく必要があろう。

質問９　普段遊びの中で，兄弟や友達とのけんか（おもちゃのとり合いや遊び方でのトラブルなど）があった場合どのように対応していますか？



質問10　普段生活の中で，お子さんに兄弟や友達との遊び方やかかわり方（優しくする，一緒に仲良く遊ぶなど）を教えていますか？



［質問９・10の考察］

普段の遊びの中でけんかが起こった時，ある程度子どもたちに任せ，必要に応じてアドバイスしている家庭が多かった。このことから，子どもたちが成長する上で，葛藤したり，話し合い，関係を調整しながら解決していくことが大切であることをこれからも啓発していくことが必要であると考える。

［全体の考察］

☆集団生活の場を活かした幼稚園教育の在り方

☆友達と一緒に遊びを工夫し，創り出す経験

家庭や地域で多くの友達と遊ぶ機会や場所が減り，保護者も幼稚園での友達とのかかわりを大切にしてほしいことを願っていることから，集団生活の場を活かした幼稚園教育の在り方を今一度見直していく必要があろう。

また，日常的な遊びも既製品での遊びが多いことから，子どもたちがかかわり合い，互いに遊びを工夫し，創りだす活動を意図的に取り入れていくことが必要であると考える。

② ソシオメトリックテスト

ソシオメトリックテストとは，子どもにクラスメートの写真や名前の書かれたリストを見せて，各クラスメートとどのくらい一緒に遊びたいかを評定してもらう「仲間評定法」と，好きなクラスメート「選択」と嫌いなクラスメート「排訴」を数名あげてもらう「仲間指名法」がある。子どもの仲間内地位を検討したり，クラスの中でグループなどを知ることができ，友達関係を広げたり，新たな友達作りをすることもできるテストである。

本研究では，グループ活動を進めていく上でクラス内での友達関係を把握するため，クラスの中で好きな友達を 3 名あげてもらう「選択」だけを行った。幼児期は好きな友達との関係を基盤にかかわりが広がっていくことを考慮し，あえて「排訴」（嫌いな友達をあげてもらう）は行わないこととした。表１はその結果である。

表１　（10 月 30 日テスト実施）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
1							○	○																							2
2	○		◎						○																						3
3		◎						○	○																						3
4								○					○																		2
5	○							○			○																				3
6									◎		○	○																			3
7												○																			1
8							○		○			◎																			3
9						◎	○					◎																			3
10			○					○			○																				3
11		○	○										◎																		3
12								◎	◎		○																				3
13		○	○								◎																				3
14																												◎	◎		2
15																					◎				◎		◎				3
16															○										◎			◎			3
17																○		○													2
18																					◎								○	○	3
19																					◎			○		○					3
20																		○	○				◎								3
21															◎			◎	◎												3
22																		○			○		○								3
23																				◎	○			○							3
24																	○									◎		○			3
25															◎	◎												○			3
26																								◎				○		○	3
27															◎						○										2
28														◎		◎												○			3
29																					○		○		○						3
30																			○	○									○		3
◎	0	1	1	0	0	1	0	1	2	0	1	2	1	1	3	2	0	1	1	1	3	0	1	1	2	1	1	2	0	0	30
○	2	2	3	0	0	0	3	5	3	0	4	2	1	0	1	1	1	3	2	1	4	0	2	2	1	1	2	4	1	2	53

テストの結果より，誰からも選ばれなかった子(4 名）や好きな友達を１～2 名しか選べなかった子(6 名)がいることが分かったことから，グループ編成する際に配慮したり，友だちとのつながりがもてるように援助していく上での手立てとした。

２　研究内容２

⑴　協同性を育む上での留意点

協同性を育むためには，心が通い合う温かな人間関係が不可欠である。そこで，柴崎氏（幼稚園じほう 2004.5 月）による「心が通い合うクラスの雰囲気づくり（以下に示す）」を参考にし，計画作成に活かしていくことにした。

① お互いが気軽に触れ合えるクラス

子どもたちの心の距離感を近づける工夫として，子どもたちが気軽に身体的に触れ合う遊びやゲームをクラスで積極的に取り入れることが有効。例えば，手つなぎ鬼や花いちもんめ，さらには服の色や好きな食べ物など同じ共通性のある友だち同士で手をつなぐゲームなど，様々な共通性で集まるゲームをクラス活動として積極的に取り入れていくことなどが意味をもつ。

② お互いの存在を大事に思えるクラス

クラスのメンバーを誰しもが分かり合っていることや，クラスのメンバーがどこでどのように過ごしているかを理解していることは，心が通い合うための必要条件といえる。そこで，クラスの全員がそれぞれどう過ごしているか理解できるために，以下の二つの大事なポイントがある。その一つとして，今日一日誰が出席し，誰が欠席しているのかを分かっていること。そして，それぞれの幼児の心のよりどころが大切にされていくことがあげられる。心のよりどころとは，初めて家庭を離れてクラスの集団に参加することになった幼児が，それぞれの支えにしているものを理解し合うことやそれぞれの子どもたちが取り組んで実現したものを大切にしていくことを意味している。

③ お互いの思いや気持ちを大切にできるクラス

4，5 歳児の担任は，それぞれの幼児が表現したい内容を素直に表現できるようにし，そこに表現された思いや気持ちを周りに伝えて相互理解していくことが大切。

④ それぞれの持ち味や都合を調整して目的に向かっていけるクラス

5 歳児になると，劇遊びなどの集団活動やサッ

カーなどの集団ゲーム，さらには様々な当番活動など，皆で取り組む活動が増えてくる。こうした集団活動を展開していく過程のなかで，皆が同じことに取り組んでいてもその進み方や結果には個人差があり，同じではないことを理解し，それぞれの幼児が自分なりの持ち味を発揮して実現することが大事であることを経験していく。

⑵ 協同性を育むための年間指導計画

・次のページ

３　研究内容３

⑴ 話し合う場の工夫と援助

① 話し合いとは

保育用語辞典によると，「話し合い」とは，2 人以上が話しことばによって互いの考えを伝え合うこと。保育における話し合いには，クラス全体で話し合う場合もあるが，多くの場合は，遊びや生活の中で友達に自分の考えを伝えて考える話し合いである。クラス全員での話し合いはテーマや進め方に気をつけないと，全員で話し合ったという形式はとっていても，保育者と一部の子どもだけの意見で終始してしまうことも起こる。また，子ども同士の話し合いの場合にも，互いに自分の考えを言い合うことは容易でも，相手の考えをよく聞くことや聞いたことと自分の考えを検討してまた相手に返すというプロセスは，子どもにとっては容易ではない。話し合いに形式的に参加できることも子どもにとっては意味のあることではあるが，機会をとらえて保育者が両者の意見を仲立ちすることによって，本来の話し合いになるように援助し，その意味に少しずつ気付かせていくことが重要である。

② グループ保育とは

保育用語辞典によると「グループ保育」とは，子ども同士のグループ単位で保育を行うこと。子どもの仲間同士で，それぞれの考えや感じたことを伝え合うことを通して，協力し合うこと，お互いを認め合う中で自主的に行動することなど，保育者が直接的に教えるのではなく，子どもの集団の中で身につけていくことを目的とする。

グループという単位を考えると，気の合う友達同士が遊ぶという自然発生的なグループと，当番や係などのためのグループ，生活グループのように保育者がある意図をもって構成するグループがある。自然発生以外のグループの構成に関しては，グループ単位で行う生活が円滑に行われることを目的とするのか，そのグループのメンバー間の人間関係をつくっていくことを目的とするのかなど，グループの構成の観点はさまざまである。また，グループをつくり，まかせることが基本ではあるが，人間関係が固定化したり，発展性がなくなったりすることもあるので，グループ内での一人一人の子どもの状況を丁寧にみていくことが求められている。

③ 協同的な活動における話し合い

国立教育政策研究所・教育課程研究センターによる「幼児期から児童期への教育」の中で「協同的な活動を進める際には，幼児同士の話し合いの場面を大切にしたい。話し合いにおいて，幼児一人一人が活動の目的を確認し，友達と共有することが大切。5 歳児の幼児は，気の合う仲間同士では，互いの気持ちを分かり合って一定の話し合いをすることが成立するが，グループの人数が多くなったり，活動が学級全体に広がったりすると，自分の考えを言う，友達の考えを聞く，みんなで一つの考えにすることができにくくなることを考慮する。また，一見話し合っているように見えても，実際には特定の幼児によって進められていることもあり，話し合いが成立するためには教師の援助が必要である。」と示されていることから，話し合いを取り入れていく上で，グループの人数や仲間関係に配慮しながら援助していくようにした。

⑵ 協同性を育むための年間指導計画

		Ⅰ期（4月～5月）	Ⅱ期（6月～7月）
発達の過程		～幼稚園っていいな～ 教師との触れ合いや友達と遊ぶ中で，園生活に親しみ安定していく時期	～一緒に遊ぼう・やってみよう～ 園生活の中で安定し，気の合う友達とかかわりながら遊びを広げていく時期
ねらい		・教師や友達と一緒に生活する楽しさを味わう。 ・興味や関心のあることを十分に楽しむ。	・友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わう。 ・自分なりの目標を持って，遊びや生活に取り組む。
遊びや生活における人とのかかわり		・教師や友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わう。 ・グループで活動する時の行動の仕方に気付く。 ・共同の遊具や遊び場を分け合ったり，代わり合ったりして皆で使う。	・気の合う友達と遊ぶ中で相手の言葉や動きを感じ取りながら遊ぼうとする。 ・友達と一緒に活動することの楽しさを味わう。 ・生活の中での問題に気づき，皆で楽しく生活するための約束を考え，守ろうとする。
		砂場・積み木・ブロック・固定遊具・ままごと・集団遊び（かごめかごめ・はないちもんめ・鬼ごっこ等） 手遊び・歌を歌う・絵本を見る	砂場遊び・色水遊び（ジュース屋さんごっこ） シャボン玉・製作遊び（廃材の利用）・サーキット遊び 製作（水に浮くもの・魚釣りごっこ）・フープ
みんなでかかわる活動	学級・グループ	・自分の名前の紹介 ・新しいグループを知る ・パートナーを覚える ・簡単なゲームや手遊び ・当番活動の仕方がわかる ・話を聞く（朝の会）	・雨天時の製作（皆で教室を飾ろう） ・水遊び ・誕生会の出し物を考えよう ・ゲーム遊び（イス取りゲーム・ハンカチ落とし） ・グループの名前を自分たちで決めよう ・進んで当番活動に取り組もうとする ・話したり聞いたりする（朝の会・帰りの会）
	園全体	・春の遠足　・朝顔植え ・体育館活動（体育館での約束・簡単なリズム遊び）	・夏祭り ・体育館活動（リズム遊び・かけっこ） ・夏野菜を育てよう
☆援助と配慮　○環境構成		☆一人一人の幼児の気持ちを受け止めながら，安心して自分の遊びを楽しめるように園生活の仕方を知らせていく。 ☆皆と一緒に動く楽しさを味わえるようなリズミカルな集団遊びを取り入れる。 ☆のびのびと安定した気持ちで生活できるように，活動の流れに沿って時間や場を設定してゆとりが持てるようにする。 ○好きな遊びを見つけ，新しい友達とかかわりが持てるようにいくつかの遊びのコーナーを設定する。	☆教師も一緒に遊びに加わり，新しい友達とかかわれるきっかけづくりをする。 ☆触れ合える集団遊びを多く取り入れる。 ☆友達関係を深めるために仲間になったり，アイディアを提供したりして状況に応じた援助をする。 ☆子ども同士の気持ちの行き違い，葛藤に十分につき合い，子どもが自分で気持ちの切り替えをできるように援助する。 ○気の合う友達と遊べるように遊具の種類や量などに配慮する。

	Ⅲ期（８月～12 月）	Ⅳ期（１月～3 月）
発達の過程	～ああしよう・こうしよう・がんばろう～ 友達とイメージを伝え合い，力を合わせてやり遂げる楽しさがわかる時期	～みんなでしよう・もうすぐ１年生～ 友達同士で目的をもって園生活を展開し，自信を持って行動していく時期
ねらい	・友達と思いやイメージを伝え合いながら遊びを楽しむ。 ・友達と一緒に共通の目標に向かって遊びを進める楽しさを味わう。	・友達との信頼関係を深め，互いに認め合いながら集団の中で自信を持って生活する。 ・友達と一緒に共通の目標に向かって遊びを進め，充実感を味わう。
遊びや生活における人とのかかわり	・いろいろな遊びに興味を持ってかかわりながら皆と一緒に活動することの楽しさを味わう。 ・自分の思いを伝えたり，友達の思いに気付きながら一緒に遊びを進めていく。 ・友達とのつながりを感じながら活動する楽しさを味わう。 ・友達と相談したり協力しながら，共通の目的に向かって取り組む。	・目的に向かって自分なりに工夫したり，挑戦したりして遊ぶ。 ・友達と共通の目的に向かって活動し，喜びや充実感を味わう。 ・自分たちで遊びや生活を進めていこうとする。 ・これまで経験してきたことを友達と出し合い，取り入れながら遊ぶ楽しさを味わう。
	運動会ごっこ（リレー・玉入れ・綱引き等） 縄跳び・ごっこ遊び・ペープサート・絵本づくり 泥だんごづくり	竹馬・縄跳び・サッカー・ゲーム遊び・郵便ごっこ 正月遊び（かるた・すごろく・コマまわし等）
みんなでかかわる活動　クラス・グループ	・新しいグループを自分たちで決める ・自分たちで当番活動を進めようとする ・グループでの製作遊び（ダンボール遊びや壁面製作等） ・ルールのある遊び（リレー・しっぽとりゲーム） ・楽器遊び ・学級全体やグループで話し合う	・自分たちで当番活動を進める ・一日の生活の流れを皆で話し合う ・これまで経験してきた集団遊びを取り入れて遊ぶ ・言葉遊び（しりとり・なぞなぞ　など） ・運動遊び（ドッチボール・サッカー・走り縄跳びなど） ・生活や遊びを進めるための話し合い（朝の会・帰りの会）
みんなでかかわる活動　園全体	・運動会・秋の遠足・お店屋さんごっこ ・お楽しみ会・じゃがいもの栽培・花の植え付け ・体育館活動（フォークダンス：パートナー交代）	・生活発表会 ・カレーパーティー ・修了製作
☆援助と配慮　○環境構成	☆一人一人の気持ちに寄り添いながら，場面や機会をとらえて内容によっては周囲の仲間に伝えたり，学級全体で考えたりする。 ☆教師が友達のよさを伝えたり，友達と楽しく遊んだりする中で，友達のよさに気付くことができるようにする。 ☆個々のイメージをまとめて実現できるように援助し，充実感を味わえるようにする。 ○自分たちで相談したり，協力したりしながら，生活を組み立てることを工夫して，十分な時間を取れるようにする。	☆学級全体やグループで取り組む楽しさを感じられるようにしながら，その中で個々の取り組みを認め，やり遂げた満足感や喜びが味わえるようにする。 ☆友達同士でルールや約束を確認し合いながら主体的に遊べる遊びを取り入れる。 ☆自分で考えたり，友達と話し合って決めたことを主体的に遊びに取り入れられるようにする。 ○グループの遊びがじっくりと進められる場や時間を確保する。

④　グループにおける話し合いの配慮と援助

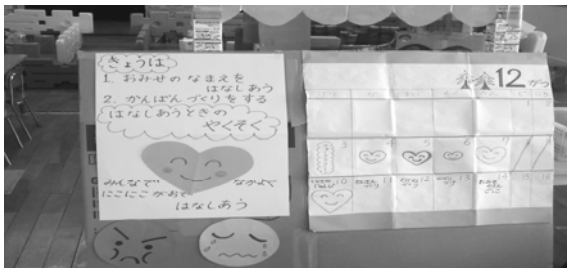
グループ（少人数）での話し合いを進める上での配慮と援助を以下のようにまとめた。

ア　話し合う内容を1～2つにする。

イ　話し合う時の約束を決めておく。

【話し合う時の約束】
・円になって話し合う。
・皆が「にこにこ笑顔（提示物）」になるように話し合う。
・思ったことや考えたことを言葉で伝える。
・友達が話している時は，顔を見てちゃんと聞いてあげる。
・皆で意見（思い）を確認し合ってから決める。

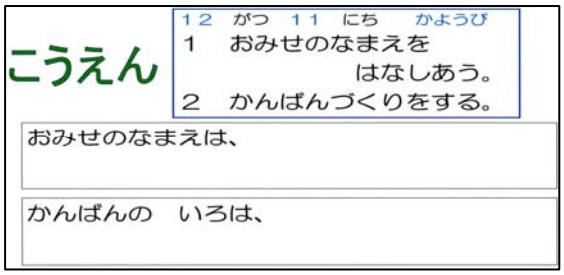
↓にこにこ笑顔（提示物の工夫）



ウ　話し合うグループは仲間関係を考慮し，できるだけ人数は５～６名にする。

エ　活動内容と話し合いの段階に応じてワークシート（話し合った内容を書きとめられる用紙：グループに１枚）を活用する。

↓公開検証保育時に活用した用紙



⑤　学級全体における話し合いの配慮と援助

ア　活動前には学級全体で取り組む活動の見通しや目標を持たせるようにする。

イ　前日の活動を振り返り，次の活動をイメージさせる。

ウ　それぞれのグループの活動の進み具合を紹介することで，それぞれの活動のつながりや一つの目的に向かっていることを確認する。

エ　活動後には，それぞれの取り組みを認め合い，明日の活動に期待がもてるようにする。

オ　一人一人がグループの中で協力したり，自己を発揮できるように，活動に入る前に相手を認めたり，協力したりする態度や言葉について話し合う場を意図的に設定する。

⑥　協同的な活動（グループ活動）展開時の配慮と援助

ア　活動を進めていく上で，子どもたちがかかわり合おうとする姿を見守りつつ，必要に応じて個々の思いをつなぎ合わせるために，それぞれの思いを確認してあげたりする。

イ　子どもたち同士では気付きにくい相手のよさや考えを時には教師が意図的に伝えたり，全体に紹介し，互いの刺激にしたりする。

ウ　時にはグループ内で思いがぶつかり合い，葛藤する場面が予想されるが，あせらずに子どもたち同士が互いに解決していこうとする姿勢を大切にする。

エ　活動が行き詰った時には，すぐに答えを示すのではなく，問いかけたりすることで，イメージや試行錯誤を喚起させる。

オ　活動を振り返る時間を設定し，次回の活動へのつなぎをする。

⑦　協同性の育ちに応じた援助のポイント（5歳児）

以下のように６つの視点で実態を把握し「A・B・C」で協同性の育ちの段階を捉え，それぞれの段階に応じた援助のポイントとして心がけた。

協同的な育ちの視点
1　活動や遊びにおける，集団（クラスやグループ）への興味・関心の広がり
2　集団の中で思いや考えを伝える力
3　集団の中で相手の思いを受け入れる力
4　協力する，一緒に活動を進めようとする力
5　役割を分担する力
6　活動内容を理解する力

検証授業前では，A の段階の子が 5 名，B の子が 18 名，C の子が７名であった。

協同性の育ちの段階

A：活動内容を理解し，仲間と思いや考えを伝え合ったり，協力したり，時には活動をリードしたりすることができる。

B：仲間意識が芽生え，仲間との活動を楽しいと感じ，少しずつ自分の思いや考えを伝えることができる。

C：自己主張ができなかったり，逆に自己主張が強くて仲間から疎外されがちであったり，仲間とのつながりや活動を楽しいと感じることがまだできていない。

A	・活動内容を把握し，目的に向かって進めていこうとする。 ・グループの皆で活動を決めたり，進めようとする ・自分の思いや考えを言葉や態度で表現しようとする。 ・自分の思いを伝え，友達の思いも受け入れながら遊びを進めることができる。 ・時には話し合いや活動がうまくいかず葛藤する場面も見られるが，改善していこうとする姿勢が見られる。	教師の援助	・活動を進めたりする際の本児のよさを学級全体に伝え，認めていくようにする ・本児だけの思いが強すぎないようにグループの仲間関係に配慮する。 ・本児がイメージしたことが他児にも伝わるように分かりやすく表現するよう声掛けする。 ・本児のイメージしたことが遊びに生かされるよう，ヒントを与えたりする。
B	・周りの友達の意見に左右されやすく，自分の思いや意見がまだはっきり表現できない場面もみられる。 ・少しずつ自分の思いを言葉や態度で表現する場面がみられる。 ・友達の思いに気づいたり，共感する場面がみられる。 ・友だちとのつながりを楽しいと感じている。 ・互いに気持ちよく過ごせる関係の必要性に気づいている。	教師の援助	・自分の思いが表現できるように場に応じて教師も話し合いや活動に加わったりして援助する。 ・本児の思いを確認しながら，本児なりの言葉で表現できるように促す。 ・一緒に活動を進めていこうとする姿勢を認め，一緒に活動する楽しさを感じさせるようにする。 ・考えたり，工夫したことが実現したり，活動に生かされるように援助する。
C	・友達と一緒に遊びを進めることにまだ興味が持てない。 ・友達とかかわろうとするが自分の思いをうまく伝えることができず，遊びの中に入っていけない。 ・活動の見通しが持てず，興味や関心も一時的で活動に飽きてしまいがちである。 ・活動を進める際にうまく話し合えずに活動から抜け出してしまうことがある。 ・自己主張するが，相手の意見も取り入れながら遊びを進めることがまだできない。 ・仲のよい友達とのつながりだけを楽しむだけで，グループなどの集団への意識がまだ持てない。	教師の援助	・活動の具体的な見通しや目標を示してあげ，本児なりの目標を持たせて取り組ませる。そして，取り組めたときにはその姿勢や努力を認めてあげ，また，周りの子へその子のよさや頑張りを伝えていくようにする。 ・本児の思いが話し合いや活動に生かされる場面をつくるようにする。 ・本児なりに友達を意識して，少しでも折り合いをつけながら活動を進めていこうとする姿を大切にし，認めてあげる。

Ⅶ　指導の実際

１　活動計画

⑴　「ロボットづくり」

回	月　日	ねらい	活動内容	援助の視点
1	11 月 14 日 （水）	○イメージしたことを伝え合う楽しさを味わう。	・紙芝居「ロボットカミイ～ちびぞうのまき～」をみる。 ・ロボットについて，イメージしたり，感じたりしたことを発表し合う。	紙芝居から，どんなロボットを作ってみたいかを話し合うことで，自分の思いを学級の皆に伝え，友達の思いにも気づけるようにする。 ☆ソシオメトリックによるグループ編成
2	11 月 16 日 （金）	○イメージや思いを伝え合いながらロボット作りを楽しむ。	・話し合う時の約束を決める ・どんなロボットにするかグループで話し合う。 ・どんなロボットに決まったのか発表する。 ・ロボットの材料や作り方を確認し合い，ロボット作りをする。 ・片づけを皆で頑張る。	話し合う内容を具体的に示す。一人一人が発言できるように話し合う時の約束を話し合い，子どもたちと一緒に決める。自分の思いを出せない子へ配慮し，教師も会話に加わったりして援助する。一緒に活動を進めようとするよさをその場で認めていくようにする。
3 4	11 月 20・21 日 （火・水）	○イメージや思いを伝え合いながらロボット作りを楽しむ。	・ロボット作りの進み具合をグループで確認する。 ・ロボットの細部（目・鼻・口など）を友達と一緒に考えながらロボット作りを進めることができる。 ・片づけを皆で頑張る。	子どもたちからいろいろな材料があることを引き出し，提示することで友達と一緒に選択しながら製作を進められるようにする。活動に取り組めない子へは教師も一緒にグループに入り，役割を見つけてあげる。
5	11 月 22 日 （木）	○ロボットを仕上げる喜びを味わう。	・ロボットを仕上げ，名前をつける。 ・ロボットを紹介し合う。	紹介し合う際に，「素敵なところをみつけよう」と言葉かけし，それぞれのグループのよさを認め合う雰囲気づくりをする。
6	11 月 26 日 （月）	○自分たちの思いを手紙で伝え，展示会を楽しみに待つ。	・友達や先生など身近な人に招待状を書く。 ・招待状をグループの皆で渡しにいく。	招待状の書き方を統一することで，字が書けない子もグループで教え合ってできるようにする。
7	11 月 28 日 （水）	○クラスの皆でロボット展示会をする喜びを味わう。	・お客さん（先生や友達）にロボットを紹介する。 ・紙芝居「ロボットカミイ～おみせやさんごっこのまき～」をみる。	紹介はできるだけ子どもたちに任せる。 これまでの活動を振り返り，皆で協力したらもっと素敵なことができることに気付かせていく。

⑵　「お店屋さんごっこ」

回	月　日	ねらい	活動内容	援助の視点
8	11月29日 （木）	○クラスの皆で共通のイメージを持つ。	・何ごっこにしたいのかをクラスの皆で話し合う。 ・グループ分けをする ・グループで何をするのかを話し合う。	イメージを持たせることで，活動の見通しを持たせる。 ☆自分で好きな活動を選ばせ，グループ編成を行うが，友達関係に配慮する。
9	11月30日 （金）	○グループで互いに思いを伝え合いながら，話し合うことができる。	・グループで作る物や遊びの内容を話し合う。 ・製作に必要な材料を考え，作ってみる。	話し合う内容を具体的に示す。話し合う際の約束を確認してから話し合いに入らせる。
10	12月４日 （火）	○友達と一緒に考えを出し合いながら品物作りに取り組むことができる。	・作る物をグループで決め，製作に取り組む。 ・色々な材料を製作に取り入れてみる。 ・皆で進んで片付ける。	教え合ったり，協力し合おうとする場面を捉え，認めていくようにする。 困った場面がでた時には，必要に応じてアドバイスしたり，一緒に製作に加わりモデルを示したりする。
11 12	12月 ５・６日 （水・木）	○友達と教え合い，伝え合いながら製作を進めることができる。	・今日の作る物を確認し，製作に取り組む。 ・教え合ったり，会話を楽しみながら製作をする。 ・進んで皆で片付けができる。	協力して製作をするグループを例にあげ，どのようにしたら皆が楽しく，スムーズに取り組めるのかを話し合ってから活動に移らせる。
13 14	12月 ７・10日 （金・月）	○友達と教え合い，協力しながら製作を進め，できあがった喜びを味わう	・でき上がりの見通しを持つ。 ・協力しながら製作に取り組む。 ・進んで皆で片付けができる。	これまでの取り組みを認め，ごっこ当日に向けての見通しを持たせることで意欲的に活動に取り組めるようにする。
15	12月11日 （火） 公開 検証保育	○お店屋さんごっこに向けて，友達と一緒に協力しながらお店の名前を決め，看板づくりに取り組むことができる。	・お店の名前をグループで話し合う。 ・グループで協力しながら看板作りをする。 ・皆で片付けができる。	今日の活動内容を話し合うことで，子どもたち自身が見通しを持ち，主体的に活動を展開できるようにする。 話し合う時の約束を再確認してからグループでの話し合いに入らせる。

回	月　日	ねらい	活動内容	援助の視点
16	12 月 12 日（水）	○「お店屋さんごっこ」に向けて友達と協力しながら看板づくりやお金作りに取り組む。	・グループで協力しながら看板を仕上げる。 ・お金作りをする。 ・皆で片付けができる。	お店屋さんごっこ当日が迫っていることを知らせ，協力して看板を仕上げるという目標を引き出してから活動に移らせる。
17	12 月 13 日（木）	○「お店屋さんごっこ」当日に期待を持つ。	・当日の役割を決め，確認し合う。 ・自分の役割がわかる。 ・他のクラスのお店屋さんを見学する。	本番をイメージしながらどのようにやりとりをしたらよいのかを話し合うことで，「お店屋ごっこ」当日に期待を持たせる。
18	12 月 14 日（金）	○友達と一緒に遊びを進める楽しさや「お店屋さんごっこ」をやり遂げた達成感を味わう。	・自分の役割が分かり，友達と一緒に協力しながら「お店屋さんごっこ」を楽しむ。 ・片付けを最後まで頑張る。 ・「お店屋さんごっこ」に向けて取り組んできたことを振り返る。	役割分担を確認し，子どもたちが自信をもって「お店屋さんごっこ」に取り組めるようにする。また，教師もお客となることで楽しさを共感していくようにする。活動後にこれまでの取り組みを振り返り，認めることでやり遂げた満足感が感じられるようにする。

２　活動の概要

⑴　「みんなでロボットをつくろう」【第１時～７時】

教師の思い：ダンボールでの「ロボットづくり」から園全体での「お店屋さんごっこ」へ

☆子どもたちが大好きな製作遊びでかかわりが持てる遊びを取り入れたい。

☆友達や学級全体のつながりを感じながら自分たちで遊びを展開していく楽しさを味わってほしい。

☆一人遊びでは味わえない協同での遊びの充実感や達成感を味わってほしい。

そこで，「ロボットカミィ」（紙芝居）の読み聞かせを取り入れ，イメージを広げたり，共有させながら活動を展開していくことにした。

【第１時】

紙芝居
「ロボットカミイ
～ちびぞうのまき～」
の読み聞かせ

読み聞かせをすることによって
・ロボットに興味を持つ
・ロボットを身近に感じ，親しみが持てる
・ロボットのイメージが広がる
・イメージの共有につながる

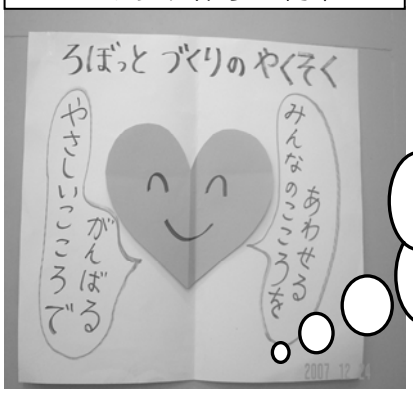
クラスの皆でどんなロボットをつくりたいか話し合う	教師の援助
Ｓ男：「大きいロボットをつくりたい。ヤマトみたいなでっかい船がいいな。大砲みたいなやつもつけよう」 Ｄ男：「四角いロボットをつくりたい」 Ｒ男：ライオンロボットをつくりたい。でも・・・つくれないな」 教師：「どうしたらいいかな？」 みんな：「大丈夫。皆で教えるよ！」 Ｄ２男：「僕は忍者ロボットをつくりたいです。しゅりけんを持っているの」 その他　いろいろなロボットが出てきた 「ねこロボット」「恐竜ロボット」「ドリルロボット」 「うさぎロボット」「犬ロボット」・・・	☆「どんなロボットが美里幼稚園に来たらうれしい？」と紙芝居の世界と重ねながらロボットをイメージさせる。 ☆一人一人のイメージしたロボットを皆に伝えたいという思いを受け止めながら，イメージを引き出す言葉かけをする。 ☆なかなか進んで発表しない子（６名）に意図的に発表する場を設ける。
教師：「ロボットは何でつくる？」 子ども：「ダンボール」「トイレットペーパー」「空き箱」「ペットボトル」 教師：「先生が準備しておくのは他にない？」 子ども：「ガムテープ！」 教師：「明日からロボットをつくるので家にある物で使えそうなものを持ってきてね」	☆材料や必要な道具を必要性に気付かせながら子どもたちと一緒に決めていく。 ☆明日の活動に期待が持てるように必要な材料を持ってくるよう言葉かけをする。

【第２時】

グループでどんなロボットをつくりたいか話し合う	
１　学級全体で「活動を進める時の約束」について話し合う。 ２　グループに分かれ，どんなロボットにするか話し合う。 ３　決まったら製作活動に移る。	☆活動しながらイメージを広げていくことを考慮し，話し合ったら活動に移れるよう環境を整えておく。

☆活動に入る前に，子どもたちがかかわり合えるように，友だちへの態度や言葉について話し合った。
その際，子どもたちが気持をつなぎ合わせる大切さを感じとれるようにイラストを工夫していった。
そうすることで，子どもたちから素敵な言葉がでてきた。

ロボット作りの約束

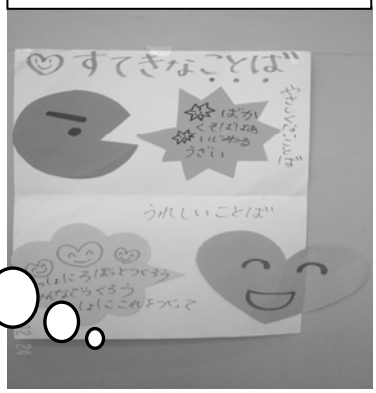


子どもたちからでてきた言葉

・やさしい心で
　がんばる
・皆の心を
　合わせる

すてきな言葉
「一緒にロボットを作ろう」
「皆で作ろう」

すてきな言葉ってなぁに？



【第３時】

○前回までのロボットの姿を絵に表わしてみる
○今日のロボットづくりのイメージを話し合い，
　絵に描き足す

『ねこグループ』
このグループは M 子を中心に活動を進めていて，みんなもその思いに共感し，協力することができてきた。話し合いも普段ならば「どうしてよいのか分からない」と言い出しがちな R 男が「これは○○だよ」と話し合いに意欲的に参加する場面が見られた。

写真

教師の援助

☆ロボットをみながら話し合えるように話し合いの場所を示してあげる。
☆ロボットをどのように絵に描き写すのかを実際に描いてみせる。また，どんなロボットにしたいのかを引き出しながら絵に描き足していく。
☆八つ切り画用紙と鉛筆をグループごとに準備しておく。
☆話し合えたら活動に移るように声掛けする。

【第４時】

○ロボットづくりの進み具合を皆で確認する
　（写真の活用）
○今日で仕上げるという目標を持つ

写真に撮った昨日の活動前後のロボットの変化を見せると「すごい」「変ってる」「変身してる」とうれしそうな笑顔がみれた。
協力して取り組んだ事を実際に写真で実感することで「仕上げよう！」という気持ちにつながっていった。

子どもたちの変容

この頃からグループ意識が芽生え，話し合い，活動に取り組む姿がみられるようになってきた。

「こんなのつけよう」
「こんなしてやる？」
「いいんじゃない」
「何色にする？」

と，互いに思いや考えを相談する姿が多くみられるようになってきた。

写真

グループの皆で
力を合わせられるように
なってきた。
「僕がもっておくよ！」

写真

【第５時】

ロボットの名前を決めて，紹介し合う

ロボットが完成し，各グループそれぞれのロボットの名前と一人一人頑張ったところを紹介し合った。

○「私たちは，スーパーロボットをつくりました」

○「私たちは，おもしろロボットをつくりました」

○「私たちは，ロボットカミイをつくりました」

○「私たちは，わにロボットをつくりました」

○「私たちは，ルビーのワンピースロボットをつくりました」

○「私たちは，タイガーロボットをつくりました」

質問タイムでは・・・

S 男の「これはライトで　光るんだよ」と自信満々に答える姿

R 男は「これは地球の皆をドキドキさせるんだよ」と自分のイメージしたことをうまく伝える姿

「このハートはなんですか？」という質問に

M 子は「ピンクのハートのロボットにしたかった」と照れながら答えたりするなど互いのロボットに関心を寄せ，細かい部分にも気がつき質問をやりとりする姿が見られた。

写真

写真

写真

⑵　「園全体でお店屋さんごっこをしよう」【第８時～１８時】

【第８時】

紙芝居

「ロボットカミイ
～おみせやさんごっこ
のまき～」
の読み聞かせ

読み聞かせをすることによって

・自分たちで新しい遊びをしてみたいという意欲

・お店屋さんごっこのイメージが広がる

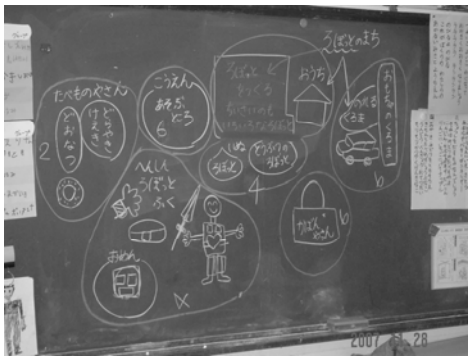
☆ロボットづくりから「もっとどんな遊びをしたいか」を投げかけ，お店屋さんごっこへとつなげていく。

☆ロボットが住む町をつくろう☆
「町にどんなものをつくりたいか」話し合う

子どもたちから「ロボットの町をつくったらおもしろそう」というアイディアが出てきた。

そこで，子どもたちと話し合い，分類したり，相談しながら遊びの種類を６つに絞っていった。

→黒板の様子



教師の援助

☆子どものイメージを具体的に引き出したり，確認したりしながら話し合いを進めていく。

☆６つのグループになるように子どもたちが納得できるように話し合いを進め，意図的に種類を絞っていく。

【第９～14 時】お店屋さんごっこに向けて

前時でやってみたいお店を自分で選んでもらい
お店屋さんごっこに向けて６グループに分かれ
取り組んでいくことになった。
くるま屋さん（4 人）　食べ物屋さん（6 人）
かばん屋さん（５人）　へんしんロボット屋（4 人）
ロボットの家・動物園（5 人）　公園（6 名）

教師の配慮
自己発揮しながら活動に取り組んでほしいという思いから自分で好きなお店を選ばせていった。しかし，グループの人数は話し合いや活動に取り組みやすいように４～6 人にしていった。

公園グループの取り組みの様子
『公園ができあがるまで』

遊べる公園が作りたい

子どもの姿
グループでどんな公園をつくりたいのかを話し合う時
園庭にある遊具をみながら
「本物の公園をつくったら楽しそう」
「あの滑り台を作りたい」「ブランコも」「シーソーもつくろう」
とイメージを出しながら伝え合う姿がみられた。
しかし，いろいろ作ってみたいという思いはあるものの，どのように作るのかという具体的な方法まではイメージできていない様子がみられた。

教師の援助
☆つくってみたいものを話し合わせ書きださせる。
☆できそうな活動に絞っていく。
☆ごっこ遊び全体の活動からイメージに近い遊び（車のレース場）を提案してみる。
☆発言の少ない子（Ｓ男・Ｎ男）の思いを引き出し他児に伝えられるように援助する。

作った車で遊べる公園がいいな！滑り台・砂場もつくろう！

カーレース場づくり
「この板をつなげようぜ」「ガムテープでくっつけよう」
「あっ　トンネルを作ろう」「このブロックでトンネル作れるよ」
「スタートはここな」「これ持ちあげてて」と何度も試行錯誤しながら作ったり，直したりして出来上がっていった。

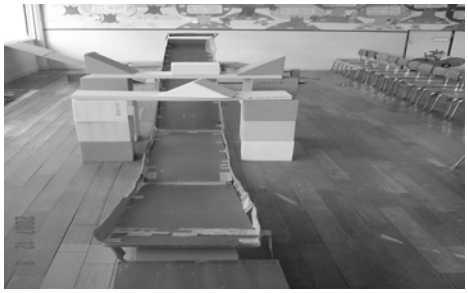
砂場と滑り台づくり
滑り台は室内用巧技台を利用することになった。そして砂場は新聞紙をちぎって作ることになり，周りをダンボール箱で囲っていった。
「本物の砂みたいに細かくちぎろう」「もっとたくさんの砂を作ろう」とイメージにつなげていくためにアイディアを出し合いながら作っていく姿がみられた。

教師の援助
☆教師も活動に加わり一人一人の思いをつなげていく。
☆積み木や板が倒れないように安全面に注意しながら子どもたちのイメージしたことが実現できるように援助していく。
☆イメージに合いそうな材料を提案する。
☆協力して作っていこうとするよさを認め，一緒に活動する楽しさを感じさせていく。

砂場と滑り台

できあがり！
できあがった滑り台に試しに滑ってみると「わ～楽しい」「もう一回やろう」「砂場だ！」と言いながら満足そうな様子がみられた。

カーレース場



【教材の工夫】

「食べ物屋さん」グループ	「ロボットが住む家と動物園グループ」	「公園」グループ
「ドーナツやどら焼きを作りたい，本物らしく作りたい」という思いを活かすために紙粘土を利用した食べ物を取り入れた。 **ゼリー** （カップ・カラーセロファン・ボンド・色紙） **ケーキ　ドーナツ　どら焼き** （紙粘土・ビーズ・ボンド・型抜き） **カップケーキ** （新聞紙・フラワー紙・色紙・紙粘土） **クリスマスケーキ** （松ぼっくり・ビーズ・ボンド）	「ロボットが住む大きい家を作りたい」という思いがあったのでマルチパネルやダンボールを利用して作っていった。 **動物ロボット　ロボットが住む家づくり** （材料）マルチパネル・ダンボール・空き箱・色紙 **教材選択において以下の点に配慮した** ☆これまで遊んだり，扱ったりして経験してきたことを活かせる教材 ☆子どもたちが扱いやすく，工夫できる教材	「ロボットが遊べる公園を作りたい」という思いがあったことから，滑り台や砂場づくりを取り入れつつ，教師も「カーレース場」を提案してみた。 **カーレース場　滑り台　砂場** （材料） 巧技台・ダンボール 積み木用の板・カラー積み木・マット 新聞紙・ガムテープ・紙テープ
「くるま屋さん」グループ	「ロボット変身屋さん」グループ	「かばん屋さん」グループ
「動く車をつくりたい」という思いが強かったので，子どもたちが教え合いながら作れる牛乳パックを利用した車を提案してみた。 （材料） 牛乳パック・廃品（小物） カラーダンボール・セロテープ・ひご・ペットボトルの芯・ハサミ・のり	このグループは 4 名それぞれが作りたい変身グッズが異なっていたことから，毎日一つのものに絞らせることで，友達と刺激し合い，協力して作っていけるようにしていった。 **変身ベルト　変身マスク　剣　変身お面** （材料） ダンボール・卵のパック・セロテープ・ゴム マジックペン・カラーダンボール・麻ひも・色紙・ガムテープ・カラーセロファン・ボンド	「肩掛けかばんや手さげかばんなどいろいろなかばんを作ってみたい」という思いから，色紙での製作を中心にしながら空き箱を利用した製作への活動を提案していった。 （材料） 色紙・シール・空き箱・ハサミ・のり カラーダンボール・マジックペン

【第 17 時】

お店屋さん当日の役割分担を話し合う

幼児の活動	教師の援助
1　お店屋さんごっこ当日の遊び方について クラス全体で話し合う。 ・お客と店員は何人にするのか ・お客と店員のやり取りの仕方 ・交代の時間 2　お店屋さん当日役割（お店の人・お客）について グループで話し合い，決める。 3　他のクラスを見学に行く。 写真 「僕は1番目にお店の人をしたいな！」 「二人ずつに分かれようね」	☆お店屋さんごっこ当日「どのようにしたら楽しく遊べるか」を投げかけることで子どもたちに必要性を感じさせながら一緒に考えさせる。 ☆ワークシート（役割分担）を準備しておく。 ☆「皆が楽しく遊べるためにどのように人数を決めたらよいか」を声掛けしながら，自分たちで話し合って役割を決めさせていく。 ☆役割がきまったら，自分の名前をシートに自分で書くように声かけする。 ☆他のクラスを事前に見学することで，明日への期待を高めさせる。

３　公開検証保育

公 開 検 証 保 育 指 導 案

平成 19 年度 12 月 11 日（火）
沖縄市立　美里幼稚園　1 組
男児 14 名　　女児 16 名　　計 30 名
保育者　徳元久理子（T1）
宮城里乃(特別支援学級：T2)

⑴　活動名　　「ロボットが住む町のお店屋さんごっこをしよう」

⑵　活動設定の理由

①　教材観

ごっこ遊びは，共通のイメージを持って遊びを展開していく遊びである。そのため，友達との考えやイメージを擦り合わせることが必要で，その中でも「お店屋さんごっこ」は，互いに自分の力を発揮しながら協同で取り組む活動でもある。これまで，子どもたちはダンボールを使ったロボット作りを通してグループで取り組み，一緒に創り上げていく楽しさを感じ，また学級全体でロボット展示会という一つの目標に向かって成し遂げる経験をしてきた。

そこで，今度は園全体で共通の目標に向かって取り組む「お店屋さんごっこ」につなげていくことで，園全体への関心を広げるとともに，協力したり，互いに刺激し合ったりしながら活動を展開し，園全体で一つの活動を成し遂げた充実感や達成感を味わうことができると考える。

②　幼児観

グループでのロボットづくりを経験し，学級の皆で一つの目標に向かって取り組み，成し遂げる経験をすることで，これまで気の合う友達との遊びが中心であった子に少しずつ学級全体のへ意識が芽生え始めている。また，多くの仲間とともに一緒に活動することが楽しいという思いも育ちつつあることから，さまざまな友達とかかわり，友達のよさに気付き，一緒に活動できる「お店屋さんごっこ」へと遊びを展開していくことにした。

今の時期の子どもたちに，仲のよい友達とのつながりから学級全体を中心にしつつ，園全体へ関心を広げ，さまざまな友達とつながり合いながら遊ぶ楽しさを感じてほしいと考える。話し合ったり，活動を一緒に進めたりする今現在の子どもたちの実態は，「皆で心を合わせることが大切」「皆が『にこにこ笑顔』になるように話し合い，活動を進めたい」という思いが育ちつつあることから，この思いや姿勢を認め，活動を展開しながら繰り返し経験させていくことが必要であると考える。自分の思いを言葉で表現することが苦手な子（4 人）がいるので，特に話し合いの場面では配慮し，援助していきたい。

③　指導観

子どもたちが一緒に活動を進めていくためには，共通のイメージを持たせることが必要である。そこで，紙芝居「ロボットカミイ」の読み聞かせを通して，それぞれのイメージを持たせ，学級全体やグループでの話し合い活動を取り入れていくことでイメージの共有化を図っていく。

子どもたちは活動を進めながら次々とイメージを膨らませていくことから，学級全体でイメージを確認したり，意見をまとめながら遊びを展開していくことを大切にしたい。そこで，常に子どもの思いがどう変化しているのかを把握し，活動の展開に柔軟性を持たせることが必要だと考える。そして，子どもたちの発想を引き出すように努め，教師自身も知恵を出し合い，共に試行錯誤しながら創り上げ，楽しさや喜びを経験させていきたい。また特別支援学級とも連携して活動を進めていく。

指　導　案			平成19年12月11日（火）
幼児の姿	ほとんどの品物や遊ぶ場所が出来上がり，「お店屋さん」当日を楽しみにしている。お店の飾り付けや看板を付けた方がよいということに気付き，看板を作りたいという思いがでてきた。それぞれのグループで話し合えるようになってきているが，うまく会話に参加できない子（4人）やまとまりが弱いグループもみられる。		
ねらい	お店屋さんごっこに向けて友達と一緒に協力しながらお店の名前を決め，看板作りに取り組むことができる。	内容	・お店の名前をグループで話し合う。 ・グループで協力しながら看板作りをする。 ・皆で片付けができる。
活動仮説	話し合う内容を示し，学級全体で話し合う際の約束を確認することで，協力して話し合い，友達と一緒に協力しながら看板づくりに取り組むことができるであろう。		

時間	○予想される幼児の活動	☆教師の援助　　◇環境構成
9：00	○今日の活動を確認する １お店の名前を決める ２看板づくり	☆今週の金曜日がお店屋さん当日であることを伝え，「楽しみだね」「もう少しだからがんばろう」と話をすることで期待を持ちながら活動に取り組めるようにする。 ◇活動カレンダーを準備しておく。
	○話し合う際の約束を確認する 話し合う時の約束 ・円になる ・「にこにこ笑顔」 ・順番よく話す ・皆で確認してから決める	☆昨日の活動を振り返ることで今日の活動の見通しを持たせる。 ◇話し合う時の約束（「にこにこ笑顔になるように話し合う」）を提示し，話し合う際の約束を確認する。 ☆一人一人が意見を言えるように順番で話すように声かけし，自分の思いを言葉で表現することが苦手な子（4人）に配慮する。 ☆各グループを周りながら話し合えているか確認し，「お客さんがわかりやすい名前がいいんじゃないかな」とアドバイスしたり，皆が納得してから決めるように声掛けしたりする。
9：10	○グループでお店の名前について話し合う	◇話し合いが終わったグループが作業に取り組みやすいように，ダンボールや五十音表などを準備しておく。まだ字が書けない子もいるので互いに教え合い，助け合いながら作業をするように声掛けする。
	○看板作りをする	☆活動終了の時間を前もって知らせておく。 ☆手でゴミを拾ったりする子を認めたり，自分で気づいて片づけをする子を見つけ褒める。「皆で片づけたら早いね」と声掛けし，皆で協力して片付けることのよさを感じさせていく。
9：40	○皆で片づけをする	☆グループでお店屋さんの名前を確認することで，全体の活動の進み具合を確認できるようにする。
	○各グループでお店の名前を発表する	☆それぞれのグループの話し合いや活動への取り組みを認め，「楽しいお店ができそうだね」と明日への活動へ期待を持たせる。
	○今日の活動を振り返る	☆名前が決まらなかったグループには，「明日また話し合おうね。一生懸命考えているから素敵な名前が決まるはずよ」と言葉かけをする。
9：50		

評価	・約束を守って話し合うことができたか。 ・協力しながら看板づくりに取り組むことができたか。

公開検証保育の様子

① 今日の活動や話し合う際の約束を確認する

話し合う時の約束を確認する

活動カレンダーを準備することで
見通しをもたせる

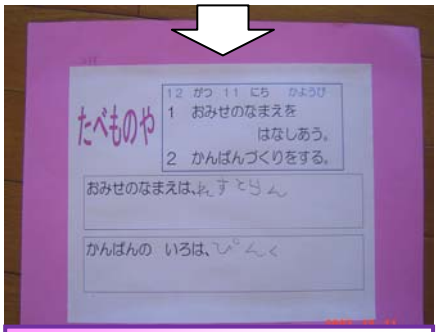
イメージしやすいような
提示物の工夫

② グループで看板作り（１お店の名前　２看板の色）について話し合う

話し合いの記入用紙

写真

話をする時は円になって
友達の顔見て話す



話し合った内容を書くことで
活動のめあてが見えてくる

写真

友達と確認しながら
話し合いを進める

③ 看板作りをする

写真

「名前を書いたら次はきれいに飾り付けをしよう」と友達と協力して仕上げていく

写真

色紙の大きさを友達と確認しながら一緒に活動を進める

写真

活動が行き詰った時には，どのようにしたらよいのかを皆で確認して，一緒に考えを出し合う

④　皆で片づけをする

写真

写真

皆が使ったペンの片づけをがんばっているＹ君
素敵だよ☆

⑤　自分たちの看板を発表する

写真

皆よりは小さな看板だけど,４人で頑張って仕上げたので満足そうな「へんしん屋」グループ

写真

僕たちは「みさと　だいいち　こうえんです」と元気いっぱいに紹介する公園グループ

４　公開検証保育の考察

活動仮説
話し合う内容を示し，学級全体で話し合う際の約束を確認することで，協力して話し合い，友達と一緒に協力しながら看板作りに取り組むことができるであろう。

(1)　保育の振り返り

①　約束を守って話し合うことができていたか。
子どもの姿として，

・「皆で仲良くにこにこ顔で話し合う」という声が出てきた。
・話し合う場所を事前に決めたことで，自分たちで円になり話し合う姿が見られた。
・「これいいね～」と友達の意見に賛同する子も見られた。
・話し合う際には，看板の色はすぐに決まり，お店の名前を決めるのに少し時間がかかったグループもあったが，全グループ話し合いで決めることができた。
・各グループ，皆が納得して決めている様子が見えた。
・話し合う際に記入用紙（ワークシート）を準備したことで，話し合う内容を確認しながら話し合う姿が見られた。

学級全体で，「にこにこ笑顔」の提示物を活用しながら話し合う時の約束を確認していくことで，このような姿が見られたと考える。

② 協力しながら看板作りに取り組むことができたか。

子どもの姿として，

・すべてのグループが看板作りに取り組み，のりづけや飾り付けに皆で協力して取り組む様子が見られた。
・「くるま屋さん」グループは，ダンボールの大きさを決めるのに時間がかかってしまったが，普段あまり自己主張しないＲ男が自分の思いを伝えようとする姿がみられた。
・五十音表を見ながら互いに教え合って字を書いたり，順番よく交代しながら書く場面が見られた。
・「皆でやれば早いね」という子どものつぶやきやグループ内で「誰かこれやってくれる」との問いかけに他児がかかわる場面が見られた。
・片付けも協力して行い，すぐに片付けができた。

協力して取り組めるように，ダンボールや五十音表などを準備し，自分たちで考えながら活動しやすいようにしたことで，このような姿が見られたと考える。

⑵ 研究協議会から

・話し合う時の約束を言葉だけでなく，絵で表現したことは子どもたちにとって分かりやすかった。
・「へんしんロボット」グループはＳ児を中心に活動を進めていて，他児はおとなしいためにまだ自分の思いを十分に出し切っていないのではないか。
・「くるまやさん」グループがダンボールを決めるのに行き詰まっている時の「Ｒ君は何をしたいの」という教師の援助はよかった。
・話し合いの約束をするだけではなく，話し合ったことを記入する用紙を準備したことで，話し合いが成り立ちやすく，活動の順番を確認しながら活動を進めることができたのではないか。
・これまで活動や生活の中で決まりを守る態度が身に付いていたことが，協同的活動を進める際に土台となっていると思う。
・看板づくりではどんな看板かというイメージをもっと引き出してから取り組ませる必要がある。
・「ロボットの住む町のお店屋さん」とあるが，子どもたちの中ではどのようなイメージがあるのか，共有できているのか。
・活動を進めさせる際に，一つのグループのよい所を取り上げ，全体への刺激を与える場面づくりをしていくのが少なかった。
・これからも，子どもたちを褒める場面づくりを多くしていって欲しい。

⑶ 考察

本時の活動の中で，学級全体で話し合う時の約束を確認したり，ワークシートを取り入れたりしていくことで，グループの仲間と協力しながら話し合い，教え合ったり，協力しながら自分たちで活動を進めていこうとする姿が見られた。このことから，話し合う内容を示し，学級全体で話し合う際の約束を確認したことは，協力して話し合い，活動を進めていく手立てとして有効であったと考える。

今回はワークシートを作成し，グループに一枚ずつ配り，話し合ったことを記入できるようにしたが，ワークシートの取り入れ方やまだ字が読めない子や書けない子への配慮を考えていく必要を感じた。また，自分たちのお店の看板をどのように飾り付けを工夫したらよいのかを子どもたちから引き出すことが弱かったので，今後子どもたちの思いを引き出す手立てや互いに刺激し合える場づくりを工夫していきたい。

Ⅷ 研究の結果と考察

本研究はテーマを「かかわり合い，共に育ち合うための援助の工夫　～協同的な活動を通して～」と設定し，基本仮説を「協同的な活動を

通して，話し合う場や援助の工夫をすることにより，かかわり合い，共に育ち合うことができるであろう」とし，研究を進めてきた。

さらに基本仮説を具体化した３つの具体仮説を立て，理論研究を行い，保育を実践してきた。そこで，３つの具体仮説を検証することにより，本研究の結果と考察とする。

１　具体仮説１の検証

幼児期における協同性の意義を捉えるとともに，幼児の実態調査を行い，分析することにより，実態に応じた援助の在り方が明確になるであろう。

幼児期の集団による育ち合いや協同性の意味を捉えるとともに，保護者へのアンケート調査を行うことによって，子どもたちが触れ合い，刺激し合いながら育ち合える場を幼稚園生活の中に意図的に取り入れていくことの重要性を認識することができた。

また，幼児へのソシオメトリックテストを実施することによって，行動観察だけでは見えにくかった幼児間の仲間意識やつながりを捉え，個に応じた援助に活かしていくことができた。

事例 1 は，好奇心が旺盛で，イメージを膨らませながら製作に取り組めるよさを持っているが，普段一人遊びが多く友達とのかかわりが少ないＳ男の変容である。

S 男は，これまで自分のイメージの世界を楽しむだけで，友達とイメージを伝え合いながら遊ぶ姿や仲の良い友達がみられなかった。そのため，ソシオメトリックテストでも好きな友達をあげてもらったが，2 人しか選択することができず，また誰からも選択されなかった。

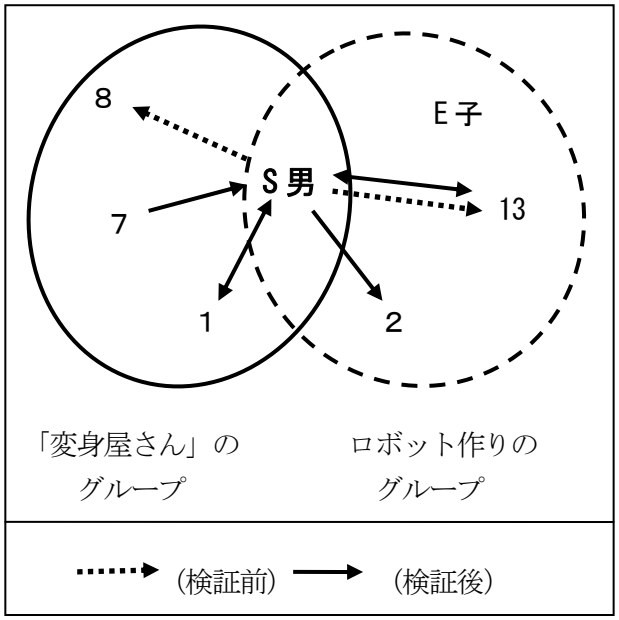
そこで，ロボットづくりの際のグループ編成では，S 男が選択した 13 番の男児やグループのまとめ役でリーダー的存在の女児 E 子を同じグループになるように編成していった。また，「お店屋さんごっこ」では本児のよさがいかせるように「変身屋さん」のグループを取り入れていった。

そうすることで，これまで一人遊びが中心であったＳ男がグループの友達と相談したり，教えてあげたりしながら活動を進めていく姿が見られるようになった。

また，検証保育後のソシオメトリックテストでは，S 男は 3 名の友達を選択することができ，１番と 13 番の男児との間に相互関係も見られ，７番の男児からも選択された。

このように，幼児間の仲間関係を把握し，意図的なグループ編成を行い，子どもたちの実態に応じた活動を取り入れ，グループ内の仲間をつなぎ合わせる援助をしていくことで，幼児間の仲間に対する意識の広がりや深まりが見られた。このことから，ソシオメトリックテストを活用しながらの個に応じた援助は有効であったと考える。

【事例１】



２　具体仮説２の検証

協同的な活動を取り入れた年間活動計画を作成することにより，見通しを持った活動の展開・援助の工夫をすることができるであろう。

検証保育では，年間指導計画を基に協同製作であるダンボールの「ロボットづくり」から園全体での「お店屋さんごっこ」へと計画を立て，

見通しを持って活動を展開していった。

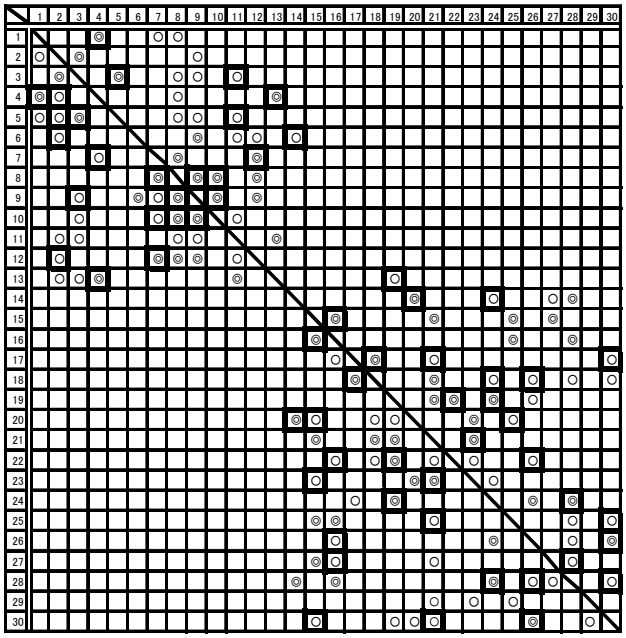
活動を展開する際に「ロボットカミイ」の紙芝居シリーズを読み聞かせすることで，ロボットに興味・関心を持つことができ，学級全体やグループでイメージを共有させながら製作に取り組む意欲につながっていったと考える。

ダンボールでのロボットづくりで，グループで話し合いながら協同製作する活動を経験することで，子どもたちは自分のイメージを伝え合ったり，一緒に創り上げる喜びを感じ，仲間意識の芽生えがでてきた。

「ロボットづくり」全体の活動後の振り返りでは，「皆の心を合わせて頑張ることですごいロボットができた」「最初はあまり作れなかったけれど，皆で頑張ってよかった」「他のクラスに紹介することができてうれしかった」などの友達とつながり合う喜びや学級意識への広がりが見られた。

検証保育前後に行ったソシオメトリックテストにおける学級全体の仲間関係の変化を以下に示した（表２）。太枠（□）で囲ったものは検証保育後の新しい仲間関係である。

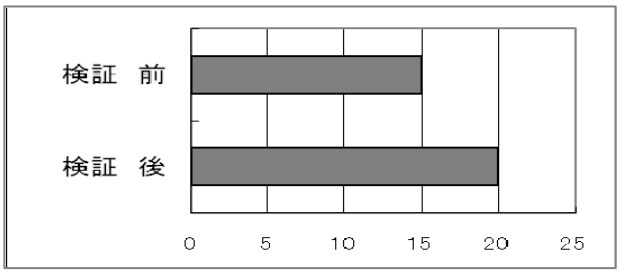
表２（◎：相互関係，○：選択）



検証保育後のテストでは，全員が好きな友達を３名あげることができ，検証前に比べ新しい友達の広がりが見られた。

次に，表３は，ソシオメトリックテストにおける相互関係の増減の変化を表したものである。

表３



この結果から，相互関係の数が検証前の 15 から検証後では 20 に増えていた。その理由として，学級全体で一つの目的に向かう協同的な活動を段階的に取り入れていったことが，結果として学級全体のつながりを深めていくことにつながったのではないかと考える。

以上のことから，年間指導計画を作成することで，共通のイメージが持てる「ロボットづくり（協同製作）」から自分たちで創り上げていく「お店屋さんごっこ」へと活動を展開することができ，友達とのかかわりも広がり，学級全体で「ロボットの住む町のお店屋さん」という新しい活動を創りだすことができたものと考える。

３　具体仮説３の検証

協同的な活動の中に，学級全体やグループでの話し合いを取り入れ，個にあった援助をすることにより，かかわり合い，共に育ち合うことができるであろう。

「ロボットの住む町のお店屋さんごっこ」に向けて，イメージを引き出しながら学級全体で話し合い，子どもたちの思いやイメージをつなぎ合わせていった。また，活動の中にグループで活動内容について話し合う時間を設け，グループ内でイメージや目的を共有し，かかわり合って活動に取り組めるようにしていった。

話し合いでは，話し合う時の約束を子どもたちと一緒に決め，必要に応じて再確認しながら活動を進め，話し合う際に話し合った内容を記

入できる用紙(ワークシート)を活用した。

そして活動展開時には，個々がつながり合えるように思いを確認したり，ヒントを与えたりするなど，互いのよさを認めながら刺激し合って活動に取り組めるように援助していった。

そうすることで，これまでは一方的な自己主張が多かった子が，「今日は何をつくろうか」「今日は〇〇がいいんじゃない」と相談しながら話し合えるようになってきた。製作に取り組む時もこれまでどのように取り組んでよいのかわからずにふらふらとふざけがちであった子が，友達の刺激を受けたり，真似をしたりしながら集中して活動に取り組めるようになってきた。

公開検証保育の「看板作り」では，友達に優しく字を教えてあげたり，交代しながら字を書いたり，「こんなしてのりをつけた方がいいよ」「これをはろうね」と友達と教え合ったり，協力したりながら活動に取り組む姿がみられた。

「お店屋さんごっこ」全体の活動後の振り返りでは，「皆がにこにこ笑っていたからよかった」「グループの皆が優しかったから皆でがんばれた」「お店屋さん当日『いらっしゃいませ』と言ったら皆が来てくれたのがうれしかった」「他のクラスのお店も楽しかった」という声がでてきた。

検証保育後に実施した「友だちとのかかわりの中での変化が見られるか」を聞いた保護者へのアンケートから，

・お店屋さんごっこでは，友達と協力し，作った時にはすごくうれしかったようで，「友達と買い物をしていくらだったよ！」などすごく楽しい園生活を送っているようです。
・製作するのが好きな子で「明日は〇〇作るよ！」「お友達は〇〇作ったよ！」と毎日園に行くのを楽しみにしていました。お店屋さんごっこで買ったものを広げて説明してくれ，お父さんが帰ってきたら「お仕事がんばっているからプレゼントしようね」と袋とリボンを探してきて包装していました。
・自分から園であった事を言う方ではありませんが，お店屋さんごっこの準備や取り組みをしている時は，聞かなくても自分から「今日は何を作った」「明日は何を作る」と楽しそうに話をしていました。
・お店屋さんごっこ大成功だったみたいですね。「とても楽しかった。またやりたい」と何度も言っていました。最近は集中して何か製作する事に目覚め，折り紙を折ったり，空き箱でハサミ，のり，ガムテープなどを使っていろんな物をつくっています（すごい集中力にびっくりです）。それと字に興味を持ち，50音の練習もがんばっています。「先生みたいに絵本が読みたい」とはりきっています。子供の成長ってスゴイですね。本当にたのもしい毎日です。

という声を聞くことができた。

また，お店屋さんごっこ当日では，「いらっしゃいませ～」とどの店でも自信を持って店員の役になりきり，自分たちで役割を交代しながら進める姿が見られた。

以上のことから，友達とかかわり合って遊ぶ楽しさを感じ，また自分たちで協力して遊びを創り上げる喜びを味わうことができたと考える。

Ⅸ　研究の結果と今後の課題

１　研究の成果

・幼児期の協同性の意義について理論研究することで，幼稚園教育における個と集団の関係や発達段階に応じた協同性の育ちに対する理解が深まり，協同的な活動の取り上げ方が明確になった。
・ソシオメトリックテストを活用することで，幼児間の仲間関係が把握することができ，新たな援助の方向性が見えてきた。
・年間指導計画を作成することで，発達の過程に応じた活動が明確になり，子どもの実態に応じながら見通しを持った活動の展開・援助の工夫をすることができた。
・紙芝居の読み聞かせを取り入れながら活動を展開することで，活動への意欲を高めさせる

とともに，イメージを共有させる援助をすることができた。

・グループでの話し合いの場を工夫し，自分たちで話し合い，活動を進めていけるように援助することで，かかわり合いながら協力して活動を進めていく楽しさを味わわせることができた。

・学級全体での話し合いを取り入れながら活動を展開していくことで，「ロボットの住む町のお店屋さんごっこ」の遊びを子どもたちと共に創り上げることができた。

2　今後の課題

・作成した年間指導計画の実践及び活動内容や援助の在り方の再検討

・年間を通したグループ構成の工夫

・ソシオメトリックテストと行動観察の併用による実態把握の継続

・協同的な活動における学び合いの場づくりと教材の工夫

・地域や小学校など異年齢間との交流活動

＜主な参考文献・引用文献＞

・文部省　1999「幼稚園教育要領解説」

・国立教育政策研究所　教育課程研究センター　2005「幼児期から児童期への教育」

・森上史朗　柏女霊峰編　2006「保育用語辞典」ミネルヴァ書房

・森上史朗・吉村真理子・後藤節美編　2006「保育内容『人間関係』」ミネルヴァ書房

・全国国公立幼稚園長会　2004.5 月，2006.10 月「幼稚園じほう」

・「月刊保育とカリキュラム」編集委員会・編「保育計画編集の基本方針＆年齢別年の計画」2007 ひかりのくに

・山口大学教育学部付属幼稚園　平成 16 年度　研究開発実施報告書（要約）

・島尻教育研究所　研究報告書 23 号（平成 17 年度後期　幼稚園教育）

・沖縄市立教育研究所　紀要 117 号　（平成 19 年度　後期　第 43 集）